

桜前線は今のあたりでしょうか。東北地方でも北に大分上がってきましたか？

忌まわしい事件や環境破壊など、瀬地がない世の中にあっても桜は必ず咲いてくれます。あれだけの花びらを付けるパワーは大変なことでしょうに、人々の心を癒してくれるかのように。桜というと小学校の入学式、満開の桜が出迎えてくれました。この時期あの光景を今でも毎年思い出します。当地で桜といえば「えぞ山桜」、例年大型連休の次の週あたりが見ごろになります。桜が開花するところですから農作物もぐんぐん育つ時期で花より団子ならぬ花より畑です。今年は当初積雪が少なくメロンハウスの除雪も楽ができるかなと喜んでいたら、三月が低温でなかなか雪が解けず炭を砕いた融雪剤を撒いてもその上に幾度も雪が積もり、結局例年通りの雪解けです。何とか四月の初めに最初のメロンを定植することができました。ほぼ一週間ごとに6回に分けてメロンを植えつけていきます。今現在6本のハウスの植え付けを終えました。腰や肩が痛かったりしますがそれなりに元気に働けるのでそれだけでも感謝しております。

学校帰り**ファンキー**というジャズ喫茶の地下に度々入り浸っていた。入口の一階、二階、地下とフロアごとに別々のアンプ・スピーカでジャズを流していた。一階、地下は私語厳禁！ お連れさんとおしゃべりしたい方は二階へどうぞ。軽いポークールを流しております。ほとんど地下にもぐってどおんと構えた JBL のパラゴンを拝みに行っていた。ハイグレードのマランツのパワーアンプでガンガン鳴らしていたパラゴンに夢中だった。中学時代のフォーク、ロックからブルース、ゴスペルと興味が移り、高校のある吉祥寺でジャズと出会った。入学まもなく仲良くなったM君に「これ聞いてごらん！」と当時はレコード。「チック・コリア リターン・トゥ・フォエバー」だった。すぐに連れていかれた場所がファンキーだった。流しているレコードのジャケットがカウンターに掛けてある。それで知ったのがマイルス・デイビスやコルトレーン、ビル・エバンス達。

いつも通り地下に降りてパラゴンの正面の席が空いていたらラッキーだった。席について店員さんに飲み物を注文するけど店員さんはジャズがガンガン流れて聞こえないから口の形でオーダーを取っていく。コーヒー頼んだつもりが、コーラが来たことがあった。ファンキーで聞いたマッコイ・タイナーのレコード買って家で聴いたけどちっとも良くなかった。

今年の二月、三十数年前に戻してくれたのは村松友視さんの短編「武蔵野倶楽部」(オール読物二月号)。

「吉祥寺駅のロンロン側の改札口を出て、書店とレコード店を……」で始まる短編に嗚呼なつかしいな程度で読み進んでいくと「ジャズ&レストランと銘打ったファンキー」に至や本編から昔の記憶の世界に飛んでしまった。

そうだそうだ、二十年ぶり一度だけファンキーを訪ねたことがあった。昔は北口を西に向かい露地を右に入ったところに東宝だったか映画館。たしかその真ん前がファンキーだった。しかし映画館が見当たらない。あたりはずいぶん変わってしまったし、確かにこのお洒落なレストランにはファンキーって書いてあるけど、こんなになってしまったのかな。

店に入る気にならず吉祥寺を後にしたことがあった。昔はコーヒー一杯で二時間ほど粘ったというか時間を忘れさせてくれた。今どきそれじゃ店もやっていけないよね。さびしい思いもしたけど、そんな時代に居られた自分は幸せだったね。華やかさや色気など縁がなかったけどジョージは青い春の舞台だった。

今おかれている「**日本農業**」について。

とりわけ水田営農が本格的な転機を迎えています。農産物輸入の自由化・関税引き下げへの圧力が強まり、農村の高齢化が進む中で、今、未曾有の農地改革が進んでいます。

主導するのは農水省で、「今後の日本の農業を背負ってたつことが出来る意欲と能力のある担い手を中心とする農業構造を確立することが * 待ったなし * の課題」だとして、「これまでのような総ての農業者を一律的に対象として、個々の品目毎に行ってきた施策を見直し、19 年度産からは、意欲と能力のある担い手に対象を限定し、その経営の安定を図る施策(品目横断的経営安定対策)に転換する」ことを打ち出しています。

この**農地改革**は日本の農業をどこに導くのか。

「農業政策の対象になる * 担い手経営体 * 数はきわめて少数に絞られて、その経営体が農業生産の為に耕作する面積は大幅に縮小するだろう。結果として農畜産物は大幅に減少し、農畜産物の輸入はさらに増大する。ほぼ 10 年後には農政のねらい通りの農業像が実現するであろう」(山形大学農学部・楠本雅弘教授)と述べ、この改革の進行過程で、「大量の遊休農地(耕作放棄地)」が発生し、結局のところ:縮小均衡:になって行くことが容易に想像できる」と結論づけています。

* 担い手について *

担い手を後継者に置き換えると、農村には、農家の後継者、農業の後継者、むら(地域)の後継者の三つがあります。都会にはない三つの引継ぎ、それぞれに担い手が育って農村の生産と暮らしは成り立っている。最近使われている「担い手」は、もっぱら農業の担い手の話ですが、家や村の力が弱まると、農業そのものがやりにくくなります。担い手の絞込みによる「縮小均衡」は JA にとってもその経営基盤を失う「死活問題」です。そこで農水省は、「小規模な農家にも、兼業農家にも、高齢者にも、「担い手になってもらう方策」として、「集落営農」を「担い手」として位置づけることになりました。

* 集落営農 *

「集落営農」には満たさなければならない条件があります。この条件を満たした営農は従来の家族経営の助け合いとしての任意の組織ではなく、あくまでも効率的な規模拡大志向の経営体です。要件つきの「集落営農」を前にむらでは様々な議論が起きているようです。少し難しくって、直接関係のない消費者の皆さんにはつまらない内容だったかもしれませんが、よく考えてみてください、皆さんの大切な農畜産物が輸入物の方が多くなってしまってもいいのです。

幸い我が家は特例により、このまま当面は続けられそうです。

毎年のことですが当地**富良野でも離農**が進んでいます。

社会全体が高齢化に向かっている中、後継者になるべき年代の多くを都会に送ってしまった農村部では深刻な状況です。現在経営困難からの離農（農産物の価格低迷が一番の理由）が過半数、しかし今後後継者がなく廃業する割合が多くなっていく模様です。

わが集落において現在農業者数は12戸、その内後継者のいる農家はたったの2戸。20年前は今の倍の戸数があったそうです。私どもが新規参入した12年前と戸数は横ばいですが、10年後は大変寂しい状況となりそうです。

既存農家に後継者がいる割合は多く見積もっても3割がいいところでしょう。

もう少し新規参入の方が増えたらいいですね。前と違って今はいろいろ行政も補助してくれています。いくら静かな農村でも新しい血を入れて活性化しないと集落そのもの維持できなくなりそうです。

農政のスローガン「農家戸数を減らして農業規模を拡大し効率的農業からコストを下げ、輸入農産物に負けない経営を……。」のもと、各種補助金を意味なくバラマキ、問題を先送りしてきたのが今の農業現場の実態です。

よく論じられていることですが、工業と農業をよく比較されます。工場である程度画一的な条件を保てる工業とは農業は比較になりません。先の例でいったらジャガイモを10ヘクタールで栽培するより、100ヘクタールで栽培するほうが効率は上がり収穫高に対する生産コストは下がります。肥料・農薬・作業機のランニングコストなど経費は計画的にはじきだせても、作物の売れる金額が厳しい市場経済に予算できない状況です。

たくさん収穫できれば安くなり豊作貧乏となり、生産コストをカバーできずに赤字になる。近頃の天候不順から人的努力では避けられない不作になれば、価格高騰しても、とたんに商社が動いて輸入する。収穫量が少ない上に作物価格が上がらない。結果よけい赤字になる。

暗い話になりますが、農業現場では深刻な問題です。

都会に住む消費者の方の意識が頼りです。われわれ農業者を儲けさせるほどでなくてもいいから、生かしてください。

それでも富良野はいままで有利に販売していたようです。

例の「北の国から」効果で地名度では全国区になり、農協の野菜ダンボールにも「北の国からのメッセージ」と印刷され、北海道富良野産として売り場では有利でした。

しかし放送終了から観光客も落ち込み、倉本先生の北の国から人気に甘えていた部分があったのでしよう。なかなか思うような収入は得られない状況になりました。

これからが実力になります。各農家が自覚を始め、本気で生き残る努力をしていかなければならなくなったようです。



今日は四月の二十四日。午後二時半。……雪が降っています。ようやく畑の大部分土が顔を出したのに、真っ白になってしまいました。低気圧の位置と寒気の下がりの具合で今年は寒い寒い春です。天気予報で気圧配置を見て、溜息が多くなっています。

長い冬を乗り越切り、遅い春をようやく迎え我が家の半年ぶりの収入はアスパラです。は一るよ来い！の**みーちゃん**よりも待ち遠しいですね。例年だと来月の半ばには皆様にお送りできるのですが今年はさあどうでしょう。これからの天気しだい。

アスパラ農家を殺すにや 刃物はいらぬ 寒気で霜でも降ればいい。……！？